# 発掘だより No.7　　1987.7.16.発行

## I. 麻生田大橋遺跡に弥生時代の墓現われる

5月15日に始まった麻生田大橋遺跡の発掘調査は、6月24日を以て終了しました。6月7日に行った遺跡見学会の後にも新たな発見が続出し、盛り沢山の調査成果が得られています。今回の調査の成果を、ここに簡単にまとめてみたいと思います。

### 1. 発見された遺構の概要（右下の図参照）

◉ 土器棺（かめ棺）

壺を使用したものが3基、甕（深鉢）を使用したものが6基出土しています。このうち89号棺は、2つの土器を組合せた合わせ口棺と呼ばれるものです。……いずれも縄文晩期の終り頃

◉ 土壙墓（土を掘り込んだだけの墓）

土壙1は、大人が足を伸ばして寝ると丁度よいくらいの規模です。中心から甕がつぶれた状態で出土しました。……弥生時代の始め頃

◉ 溝（平安時代～江戸時代）

平安時代以後の新しい時代の溝が何本も発見されています。おそらく畑や屋敷の境をなしていた溝だと考えられます。溝の中からは、土鍋や皿などを中心とした当時使用して捨てた土器が沢山出土しています。

◉ 掘立柱建物跡（柱を土に埋めた礎石を使わない建物跡）

調査区の北側に掘立柱建物跡が存在したことが、発見された柱穴により判明しました。2間×2間（ただし、この1間は7尺＝2．1m）の建物跡で、平安時代～鎌倉時代の頃のものと思われます。

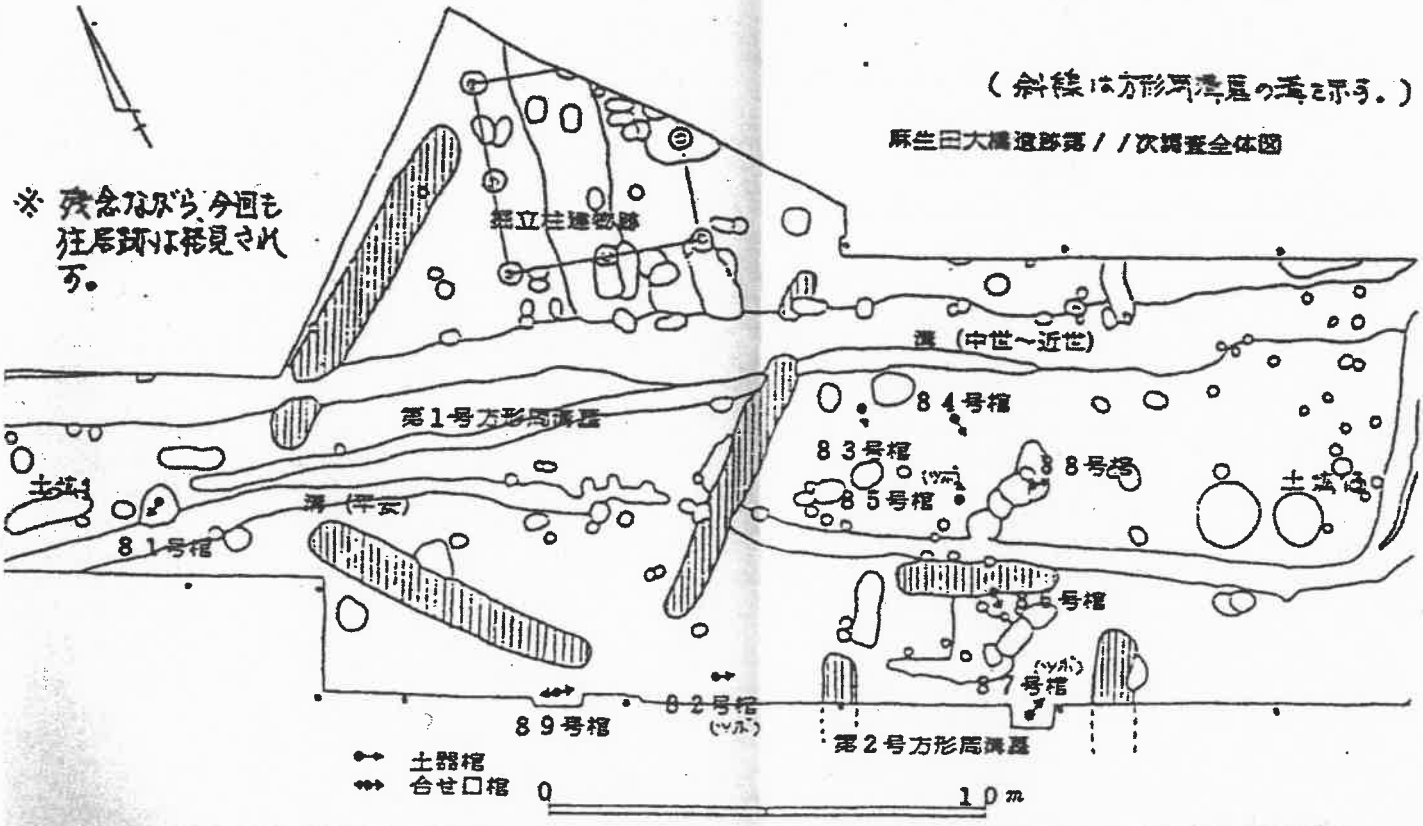
## 2．市内で始めて発見された方形周溝墓（ほうけいしゅうこうぼ）

麻生田大橋遺跡は、縄文時代晩期の後半（今から２千数百年前）に栄えた村の跡であり、今まで弥生時代の遺構・遺物はあまり発見されていませんでした。それが今回、方形周溝墓という弥生時代に特徴的な墓が発見されたことにより、この遺跡が、弥生時代にも村として栄えたことがわかりました。

第２号方形周溝墓からは、胴の一部を打ち欠いて捨てられた壺形土器が出土しています。この土器から、第２号方形周溝墓は弥生時代中期後半に造られたものと考えられます。

※　方形周溝墓とは、四方を溝で区画し、その内部に埋葬を行った墓のことです。作った当時は、掘り上げた溝の土を内側に盛ったりしてマウンドがあったようで、そこに木棺等に入れた遺体を埋めました。しかし、今回の調査では、遺体を埋めた主体部は確認されていません。

方形周溝墓のようす（想像図）



## Ⅱ．馬見塚第６号墳調査概要

麻生田大橋遺跡の西側の台地上は古墳の密集地帯であり北から上野古墳群、馬見塚古墳群、円福原古墳群といった３つの古墳群が存在します。戦後の開発によりその多くが破壊され、現在わずかに３基が残るのみですが、その一つである馬見塚第６号墳の発掘調査を６月下旬～７月上旬にかけて行いました。

### １．発掘調査の概要

今回の発掘調査は区画整理事業に伴うものですが、当初この古墳の存在は知られていませんでした。土地を造成するため樹木を伐採したところ始めて発見されたもので、古墳もしくは中世の塚（六十六塚か？）と考えられるため発掘調査が行われました。

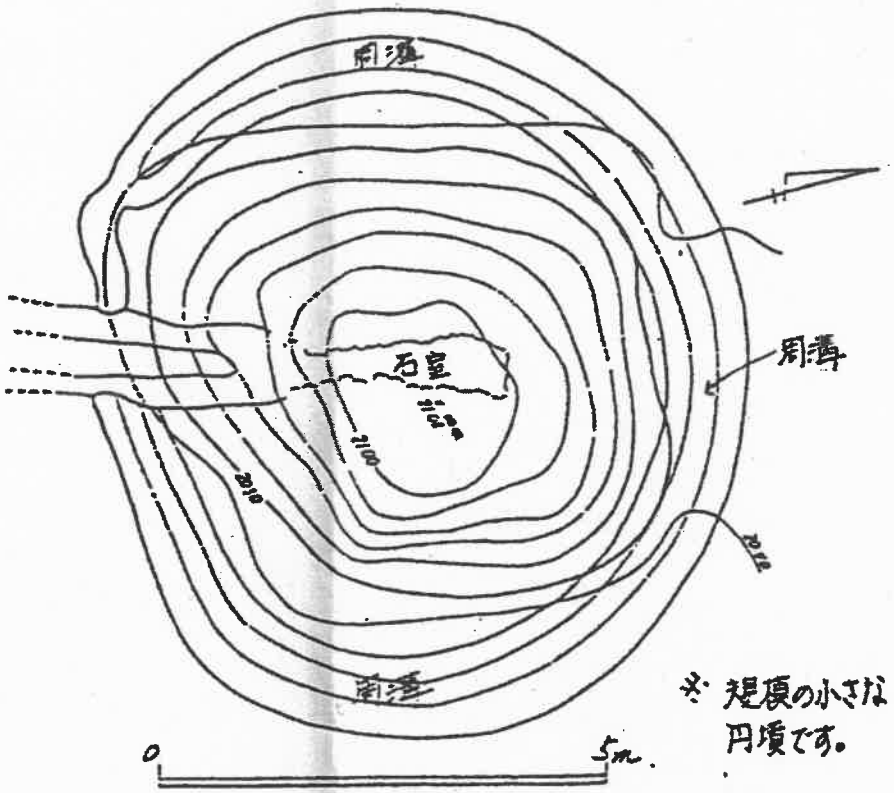
調査は６月２６日に始まり７月８日に終了しました。最初は中世～近世にかけての塚と思われましたが、調査の途中で立派な石室が現われ、古墳を再利用した塚であることがわかりました。

### ２．出土遺物

出土した遺物は意外と少なく、羨道（せんどう）（入口）付近から須恵器（すえき）の蓋坏（ふたつき）や平瓶（へいへい）が、また石室内から鉄製刀子（とうす）が１点出土したのみです。出土した遺物から、この古墳は７世紀の前半（聖徳太子の頃）に造られたものだと考えられます。

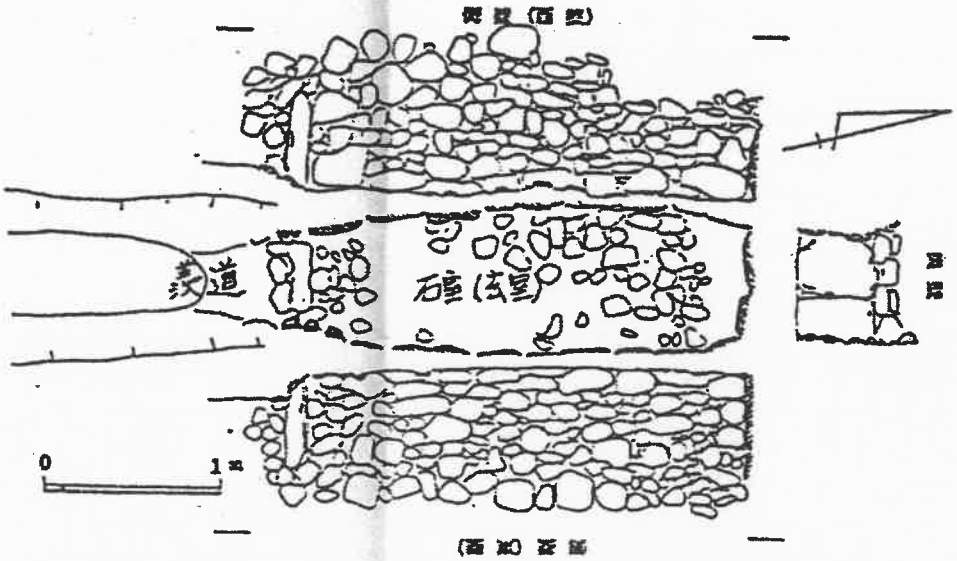
３．墳丘

発掘調査前には、直径約６ｍ．高さ６０㎝の円形の盛土がありました。古墳の中では非常に規模の小さいものと言えます。後世、塚として若干手が加えられているようで、回りに溝（周溝）が掘られています。




４．石室

横穴式の石室で、南側から入るようになっていました。奥行2.5m.幅 0.8mを測ります。天井石はありませんが、小規模ながらも立派な古墳です。




†　まだ古墳の石室は残っていますので、一度ご覧になってください。

## Ⅲ．三河国分寺跡発掘調査近づく

昭和６０年度・６１年度と続いた三河国分寺跡の発掘調査も、今年で３年目となります。過去２年間の調査で、徐徐に寺域（寺の範囲）、伽藍(がらん)配置（建物の配置）といったものが判明してきましたが、今年はどんな発見があるでしょうか。

調査は昨年と同じく、ほぼ夏休みの間（７月２０日から８月末）、４０日間行われます。８月後半には遺跡見学会や講演会も予定していますので、お誘い合わせの上ご参加下さい。

### １．今までの調査の概要

(1)　寺域

寺を囲んでいた築地塀(ついじべい)の跡が数ケ所で確認されています。これによって東側と西側の寺の広がりが分かりましたが、北側と南側の広がりはまだはっきりしていません。

(2)　伽藍配置

現在の国分寺本堂にほぼ重なる形で金堂(こんどう)が存在したことが分かっています。この金堂から回廊（かいろう）が東西に伸び、南下して中門につながると想定されます。また、金堂の北側では、講堂と推定される建物跡が発見されています。

### ２．今年度の調査場所（右図の黒塗りつぶし位置）

(1)　寺域

寺域を確認するために、築地塀の北西・北東・南東隅にあたると推定される場所を調査します。

(2)　塔跡

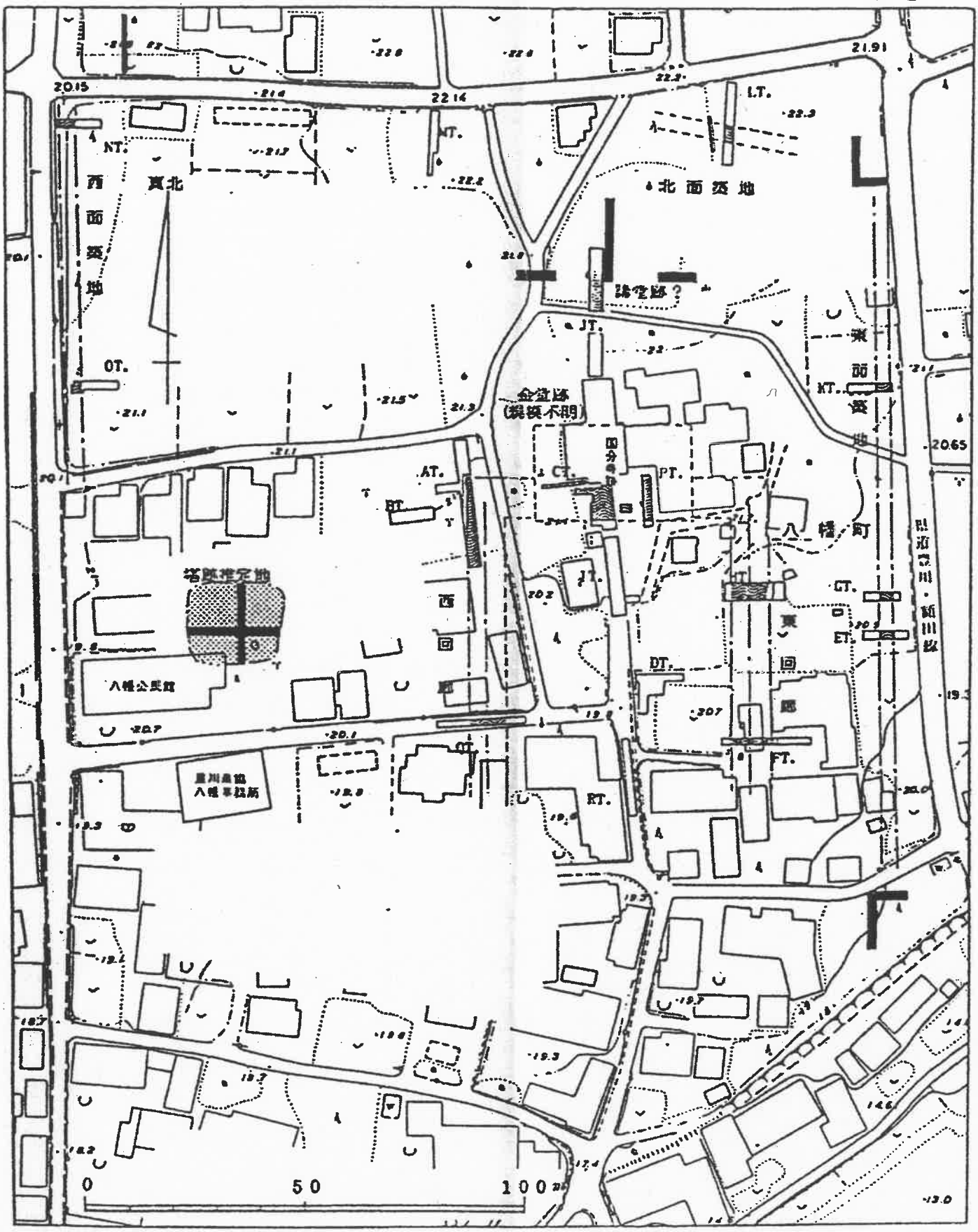
七重塔が建っていたと云われる塔跡の規模を確認する調査を行います。

(3)　講堂跡

昨年の調査において、はっきりしなかった講堂跡の位置の確認を行います。

※　今、地域文化広場では、特別展「豊川の遺跡」を開催しています。国分寺跡で出土した瓦や土器、すずりなども展示してありますのでぜひご覧になって下さい。

（９月２７日まで！！）




三河国分寺跡

▬ 今回の発掘調査場所　　AT.～RT.は、昨年、一昨年の調査場所